

国民文化祭で「稲むらの火」が いろいろ取り上げられました

10月30日から『第36回国民文化祭・わかやま2021 第21回全国障害者芸術・文化祭わかやま大会』が和歌山県内の会場で始まりしました。29日に前夜祭として和歌山県民文化会館でクラシックオーケストラコンサートが開催されました。テノール歌手秋川雅史さんの「君が代」「和歌山県民歌」独唱、オンステージの後、今回



のメインコンサート、向山精二氏作詞・作曲・指揮による「紀伊の国交響組曲第六楽章 世界津波の日：濱口梧陵」が映像付きで演奏されました。

次に、広小学校5、6年生の「稲むらの火」の合唱も大舞台にもかかわらず、みんなすばらしい合唱でした。秋川さんとのコラボもたいへんな思い出になったことでしょう。すばらしかったです。

その他、「新作オペラ 稲むらの火の物語—梧陵と海舟」、防災人形劇「稲むらの火」が上演されたようです。

<稲むらの火の館の紹介>

濱口梧陵記念館/津波防災教育センター

〒643-0071 住所 和歌山県有田郡広川町広 671

<http://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

*開館時間：午前10時～午後5時(受付終了4時)

*休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

(世界津波の日の11月5日は開館)

年末年始(12/29～1/4)

*記念館だけの入場は無料です

*また、6月15日と11月5日は無料です

第16回稲むらの火講座ご案内

9月に予定していましたが、改めて開催いたします。

今回も、「山地 久美子先生」で大阪府立大学客員研究員、大阪府防災会議委員をされています。淡路島の野島断層保存館や東日本大震災の宮城県南三陸町、熊本地震被災者の皆さんとともに「全国被災地語り部シンポジウム」を開催、全国の被災地をつなげる仕掛人として活躍されています。シンポジウムには、「稲むらの火の館」もお招きいただいています。



山地先生には昨年3月、今年9月にお越しいただく予定で準備させていただきましたが、コロナで中止しました。その間、先生には「全国被災地語り部国際シンポジウム」神戸大会の開催の中心人物として活躍されました。この大会では、「館」の館長が実行委員として、熊野享広川町日本遺産ガイドの会会長が分科会へ登壇する予定です。

今回の第16回稲むらの火講座講演会は

日程 令和4年1月29日(土)

午後1時半～3時

場所 稲むらの火の館3階ガイダンスルーム

演題 「全国被災地語り部シンポジウムの
取り組みから考える防災・減災」

コロナが終息してきているようですが、今回も、念のため60名定員で開催したいと思います。また、当日までに連絡する必要も考えられますので、参加の申し込みは必ずお願いします。申込、問合せは、稲むらの火の館まで

電話 0737-64-1760

FAX 0737-64-1761

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第9回 分担と連携、そして連帯

前回のコラムでは、「自助」や「共助」といった防災の分野で言い慣わされている“善意”のフレーズが、実は、自己責任社会に根差した冷たい論理にからめとられている可能性があることを指摘しました。今回は、すこし言葉を替えて同じ問題を見つめなおしてみましよう。

よく、難敵に対しては「分担」して立ち向かうことが大事だと言われます。防災の分野では自主防災組織などにおいて、「救助班」「避難誘導班」「消火班」「避難所開設班」などを決めて作業を「分担」し、全体の効率化を図ろうとしています。この考え方は、ある意味でとてもスマートです。

しかし、実際には、災いも招き寄せています。まだ現場では救助活動が続いているのに、避難所開設班は炊き出しの準備にとりかかろうとする、火災が起きていなければ、消火班は“お役御免”だと思っのんびり構え始める。自分の持ち分だけを見て、他を思いやる心持ちを失ってしまう。

ここには“悪意”はありません。構造的な問題です。「分担」を徹底した時にこそ生まれがちな、「連携」を阻む“落とし穴”なのです。

さて、前回のコラムでは、「困ったときはお互い様（互助）」という古典的なフレーズも呼び出していました。その基盤にあるのは、いわば「連帯」の精神です。江戸時代に、濱口梧陵が地震や津波という危難に立ち向かっていたとき、「自分の責任が及ぶ範囲はどこまでか」とか、「自助努力なき者は結果を甘受すればよい」だとか、「痛み分けなんて単なる美談だ」とか、そうしたさもしい算盤勘定をしていたのでしょうか。最大限に、皆が出せる力を持ち寄って、災害の苦しみや悲しみに心をくじかれないように、懐深く人心を束ねていた（連帯を促していた）のではなかったのでしょうか。私たちは今も（今こそ）、梧陵さんの“生き様”から多くを学ぶ必要があると考えます。

被災地を繋ぐ「さおり織り」体験会

2004年スマトラ島沖地震・インド洋津波、2011年東日本大震災の被災地の方々4000人で作った布が、11月5日の「津浪祭・世界津波の日」に「稲むらの火の館」で展示されました。

「ツナミクラフト」代表の東山高志氏（兵庫県西宮市在住）が、これらの被災地で被災者に布を織ってもらったものです。これまでに、4000人で作った布は400mになるそうです。国内の19都道府県と海外3ヶ国になります。11月5日の展示は、一階通路、二階渡り廊下、三階ガイドンスルームに展示いただきました。これで都道府県としては20番目になりました。

「たて糸は被災地、よこ糸はみなさん」。それ



ぞれの被災地で布を織り、繋がってきたそうです。布には、携わった人の写真やメッセージがついて

いました。ここに入っている写真は、白黒ですからよく分からないのですが、非常に艶やかでカラフルな織物でした。11月5日は展示だけでしたが、次に下記の日程で、「稲むらの火の館」でもこの布織りを体験していただけることになりました。ぜひご参加ください。

◎日程 令和3年12月24日(金)から26日(日)までの3日間午前10時～午後4時です。

◎場所 稲むらの火の館

この12月24日は「稲むらの火」の安政津波が起こった新暦の日です。12月26日は、スマトラ沖地震・インド洋津波の起った日です。このように、忘れてはいけない、語り継がなければいけない日に、この体験が出来るのです。

一人10～15分です。少しお待ちいただく事があるかもしれませんが、2台の織り機を使用するそうですから、申し込みの必要はありません。子ども達も冬休みに入りますので、参加していただけます。お待ちしております。